

尾形国治著『明治期文学の諸相』

畑 實

本書は四部からなっている。第一部が作品論であり、第二部は二葉亭四迷の『浮雲』、第三部が雑誌探索、第四部は余滴である。この構成は尾形氏が「あとがき」で述べているごとく氏自身の歩みをなぞっていると言える。早稲田の第一文学部の露文学専修を了え、早稲田大学図書館に勤務し、次いで大学院で日本文学を専攻された氏には、日本文学とロシア文学との両面にわたったの視野があり、それが第一部第二部の仕事に生かされている。そして図書館勤務の間に「書誌文献の重要性和面白さを知った」ということが、第三部や第四部の一部にみられる雑誌探索と結びついているのである。

第一部の作品論は『残菊』論を除いた「二つの翻訳」「田山花袋訳『コサアク兵』論」「芥川龍之介『山鳩』論」すべてロシア文学とくにトルストイに関係した事柄だ。「二つの翻訳」は露伴が明治二十六年に訳した「初陣」（トルストイの「セバストウポルの落城」）と三十四年嵯峨の屋お室が「太陽」に連載した同じ作品の訳とを比較したものである。露伴の訳は英訳からの重訳だが、トルストイの描写手法の特徴を見逃さずに写して成功しているが、

当時「浴泉記」や「罪と罰」などレルモントフ、ドストエフスキーの訳が出たこと、かれの「風流微塵蔵」の連載完成に人々の関心の目がむいていたために注目されなかったという。これに對し嵯峨の屋訳は自然描写のすぐれた点は再現しているが、「初陣」が持っている主人公の微妙に揺れ動く心理描写や主人公の印象的外面描写の部分が省略されていると指摘し、その差は芸術品として訳出しようとする露伴と日露戦争を三年後に控えての考慮から軍人として相応しくない部分を省略したため、せつかくロシア語からの訳であるのに平面的で具体性を欠くことになったと評している。また田山花袋の『コサアク兵』については、テキストが悪くかなり粗訳だが、心理描写の部分には省略がなく、力を入れて訳してあって、自然と少女への憧れが訳筆の上に出ていてこれの初期作品群に重要な役割を果たしていると述べている。尾形氏はこれら三つの訳を考察する時、単に訳のよしあしをみるだけでなく、三つの訳がそれぞれの作家のどんな時期にどんな事情で出されたものかを考えており、今まであまり注目されなかった訳業を評価している点注目してよいだろう。とくに「初陣」については、露伴を考える時かが自力で外国文学を摂取していたことは重要な意味があるのに人々は無視しているとの柳田泉氏の言葉を紹介しているが、その指摘を埋めようとする一つの仕事だ。さらに二つの論考の中で「セバストウポリ」と「コサック」の英訳原本の探索がなされているが、そこにはロシア文学と文献探索という著者の学問の特徴が浮かぶ。

尾形氏は「二葉亭四迷に対する関心は、早くから私の中にあっ

た」と言う。この言葉を裏書きするように、第二部の『新浮雲』を読むはこの著書の中心部である。これは「文芸と批評」と「比較文学年誌」に発表した『浮雲』の表現「『浮雲』とゴンチャロフの『断崖』」の二論考と関東学院大学の「紀要」に「明治の青春」として二葉亭四迷を論じたもののうち『浮雲』を論じた部分、それにあらたに書き下した『浮雲』中絶にふれた一篇とから成っている。このうち筆者が興味をひかれたのは『浮雲』の表現」と『浮雲』とゴンチャロフの『断崖』の二篇だ。

『浮雲』の表現」で尾形氏は「文体の表現上の特質と作品世界における人物像の変貌の過程」を考えてみるのだと言ひ、『浮雲』でお勢の母親に対する呼称をみると「母親さん」と「慈母さん」の二通りがあり、「母親さん」から「慈母さん」へ呼称が変化しているが、その変化は「お勢とお政の關係の潜在的な変化をおのずから暗示している」という。すなわち「母親さん」はお勢が母に對立者批判者の言動をとっていた時、それが第二、第三篇で「慈母さん」に移行するのは「お勢のお政の世界への接近と同化」への動きがあつた時であり、その呼称の使用とともにお勢の本質があらかになつていくと説いている。「浮雲」とゴンチャロフの『断崖』は先の論と密接に關係しているものだ。氏はまず『浮雲』と『断崖』の關係については必ずしも十分に言及がなされてきたとはいひがたい。とくに『浮雲』と『断崖』の表現上の共通性についての考察は皆無で、あり、「原作品（ロシア語のテキスト）」との比較対照がやはり必要であり、また重要であるように思う」と述べる。そうして『浮雲』のお勢お政と『断

崖』のヴェーラと祖母タチヤナにおける呼称の変化と人物との関わりについて考察し、お勢とお政の場合と同様に質は違ふがヴェーラは祖母と對立的批判的立場にいる時は祖母に対し「B」とか BaYymka の呼称で統一されているが、祖母との間に心が通じ合うようになると「B」から「B」にかわると言う。「B」はあなたという丁寧ないく方であり、「B」はくだけた親密な間だけに用いるもので、こゝに微妙な人間關係が表現されているのだ。尾形氏がこの変化に気がついたのはロシア語を学び、ロシア語のテキストを読んだことによると言えるであろう。『浮雲』と『断崖』との間に今まで言われてきたことと違つた關係を見出すことにロシア語が大いにあづかつてゐる。

二葉亭四迷に関心があるというだけに『浮雲』に対して第一篇から三篇まで着実に分析している。しかし、その中に『浮雲』とゴンチャロフの『断崖』で「僕は文章ではガンチャロフが好きである」という二葉亭の言葉を紹介し、次いで二葉亭がゴンチャロフの文章や表現までを把握理解し「それを登場人物と作品世界との関わりにおいて意識的に創作上に実現しようとしたと考えられる」と言っている点についての積極的言及はなされていらないように思う。また文三のことを安易に余計者ときめつけるのを稲垣達郎氏の文三の官僚機構への叛逆者でもなく批判者でもないその本体は官員への頽廢的同化が基底にあるとの指摘を文三の本質を捉えた鋭い指摘と言っているが、ロシア文学にあらわれる余計者の本質と文三との根本的違いについてより明確にできるのは氏ではないだろうか。これらのことは大変な仕事だと思ふが、ロシ

ア文学と日本文学とを統合した眼をもった尾形氏にとり組んで追究し明らかにしていってもらいたいことだと思う。

第三部の「新小説」「趣味」「女性」ばかりでなく「余滴」中の「同人雑誌」「胡桃」のことのような雑誌探索の仕事は「書架の連なりに身を沈めることの楽しみ」が習性となり「心が落ち着く」という氏にとっては、最も適した楽しい仕事であつたろう。とくに「胡桃」に関しては他誌とちがい小文ではあるが、ブブノワ女史の表紙に注目するなど、この雑誌に対する思いが感じられる。「余滴」にはこの他に宋の詩人陸游と紅葉との関係とそれにからまる「金色夜叉」の主題を考えた「紅葉と陸游」、新聞雑誌の記事を中心に第一、二回の雨声会を「寄書」にふれながら概観した「雨声会」のこと」などそれぞれユニークな論考だ。

かつて鷗外の『文づかひ』を巖本善治が評して、鷗外は今までドイツを舞台としてドイツ人ばかりを題材にとってきたがこれか

新刊紹介

東郷克美著

『異界の方へ——鏡花の水脈——』

東郷氏の初の論文集である本書に収められた二十五編の論考は、何れも氏の業績中の代表的なものであり、同時に近代文学研究史においても見落とすことのできないも

らは日本のこと日本人を中心とした作品を作れと論じたのに対して石橋忍月とは反対し、鷗外が真技倆をあらわすのはドイツを舞台にするにあると信ずると言い、「人間に一つの純粹なる特色あるは人間の誇るべき一つの裝飾なり」と述べた。忍月の真似ではないが、尾形氏の特徴は日本文学を基礎にもつたロシア語とロシア文学の知識、そして書誌に関する興味と知識の二つである。トルストイ、ツルゲーネフから世紀末の文学などロシア文学が日本文学に与えた影響は大きい。それらかずかずのテーマの説明をはじめ、書誌の分野でも氏がその特技を生かしていく仕事は沢山あるだろう。今後とも本書にみられるように明治期の広範な分野で価値ある業績をあげられることを期待している。

（関東学院大学人文学研究所叢書XI 一九九四年六月八千代出版KK刊）

定価 二八〇〇円

のばかりである。第一部・鏡花、第二部・

漱石、柳田、折口、第三部・芥川、谷崎、

第四部・横光、川端、太宰、といった四部

構成であるが、徹底して諸篇の隠れた「水

音」を聴き、「異界」「境界」への入口を探

り続ける。本書において「水脈」「異界」「境

界」に彷徨うことはつまり「文学」「文学」におけ

る多義的領域に踏み込むことであり、また、

華々しい「近代」の含み持つ「闇」を凝視

することに他ならない。読者は近代史・近

代文学史の底辺を伏流する「鏡花の水脈」

という名の密かな、しかし確かな新たな流

れ（新たな文学史）を発見することになろ

う。本書が単なる作家・作品論集の枠に止

まらない所以である。

（一九九四・二 有精堂 四六判 五二〇

頁 三八〇〇円）

〔神谷 雅志〕